

日本ワイルド協会第27回秋季大会 シンポジウムの要旨：

「21世紀のオスカー・ワイルド——ワイルド文学の可能性を探る」

司会・講師：玉井 暲
講師：角田 信恵
講師：薩摩 竜郎
講師：鈴木 英明

ワイルド研究の現在

玉 井 暲

オスカー・ワイルドをめぐる研究の現在はどうなっているのか。その表層的な状況については、1990年から本年にかけて英米において出版されたワイルド単独の研究書・参考書の冊数を数えただけでも、ワイルド研究の隆盛のほどが把握できよう。その数はおよそ60冊に達する（添付のビブリオグラフィーを参照）。とはいえ、一步踏み込んで、ワイルド研究にあってはいったい何が問題になっていて、研究はどの方向に向かって展開しているのか、といった根本的な次元からの考察になると、研究テーマや関心のありようから研究方法論に至るまで多種多様であるため、その見取り図を描くさえ容易ではない。

そうしたなかで、ワイルド研究の現状を把握することができ、かつ、21世紀におけるワイルド文学の可能性を考えるのに幾つかのヒントを与えてくれる研究書が何冊か出版されている。それには、以下のものが挙げられよう——

1. Regenia Gagnier, ed. *Critical Essays on Oscar Wilde*. New York: G.K. Hall, 1991.
2. Peter Raby, ed. *The Cambridge Companion to Oscar Wilde*. Cambridge:

Cambridge UP, 1997.

3. Melissa Knox. *Oscar Wilde in the 1990s: The Critic as Creator*. New York: Camden House, 2001.

このうち、最新のものである Knox を見れば、研究の動向がある程度理解できよう。まず Knox は、その目次に示されているように、6つの研究的立場に整理している。まず、(1)精神史 (Geistesgeschichte) という研究方法論を設定し、それを、クロス・リーディングと演劇論的批評の二つの立場に分けて提示している。以下、(2)新歴史主義、(3)ゲイ・クイアー・ジェンダー批評、(4)読者反応批評と続き、このあとに(5)アイルランド・エスニック研究と文化的批評と、(6)伝記的批評が挙げられている。Knox 自身は、このなかの伝記的批評の立場に立っており、ワイルドの複合的な個性の秘密を読み解くことに関心を示し、作者ワイルドをその作者を構築した文化のテキストとして読もうとするポストモダニズム的主体論を退けている。

Gagnier や Raby のものにおいては、研究方法論にもとづいてワイルド研究の現状を整理する発想は際立って示されてはいないものの、その現状への鋭い認識はまぎれもなく確認できる。Gagnier は、(1)ワイルドの文学活動を当時の社会的価値体系への挑戦と見る見方、(2)『まじめが肝心』におけるワイルドのウィットを言語的関心から考察しようとする立場、(3)ワイルドの批評理論を評価しようとする立場、(4)ワイルドの人生と文学における悲劇性を考察する研究、という4つの部分に分けて、それぞれの代表的な論文を収録している。一方の Raby は、(1)作者の存在をめぐるコンテキスト、(2)その文学的業績、(3)後世の文化・社会に与えた衝撃、という3つの観点に分けて、それぞれの観点に関心をもった代表的研究論文を収録することによって、ワイルド研究の現在の全体的状況を描き出そうとする。

これらの著書・研究論文集に示された様々な研究的関心をさらに整理して大きく捉えるならば、ワイルド研究の現場に新しく登場した立場として、コンテキストを重視する研究とセクシュアリティ・ジェンダー批評が挙げられよう。コンテキストを考慮する立場としては、従来の研究においても、伝記的事実や世紀末時代の文学的・芸術的背景を探ることを通してワイルドの人生・作品を解釈しようとする立場が見られたことは確かだが、最近のコンテキスト派の研究はより精緻になって、文学の内と外の世界との相互交渉的な複合関係を突き止めようとする

関心にもとづいている。この立場からの研究の嚆矢として、ワイルドの学生時代の読書経歴を調査した、Philip E. Smith II and Michael S. Helfand, eds., *Oscar Wilde's Oxford Notebooks: A Portrait of Mind in the Making* (Oxford UP, 1989) が挙げられよう。コンテキストを重視するといっても、未知の資料を多数収録した本書がより伝統的な歴史観に従っているとするならば、これとは発想を異にして、ポストモダニズムあるいはフォーコー的文化観の立場から、ワイルドの文学テキストを経済的・社会的コンテキストとの関わりにおいて捉え、その間の照応関係を検証しようとする研究も盛んになってきた。その代表は、Regenia Gagnier, *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public* (Stanford UP, 1986) であろう。

こうしてワイルド文学を読み解くに当たって、「コンテキスト」を、伝統的な歴史主義や実証主義において把握するにしろ、政治的・文化的背景を重視する新しいポストモダニズムの立場に立って捉えるにしろ、このコンテキストへの関心にもとづく研究がワイルド研究の地平を大きく拡張したことはここに確認できるだろう。

こうした状況のなかから、ワイルドにおけるアイリッシュネスを考察する研究が生まれてきたのは予想できることであった。Jerusha McCormack, ed., *Wilde the Irishman* (Yale UP, 1998) や、Declan Kiberd の業績 (Raby の同上書を参照) がその代表であろう。このアイリッシュネス研究は、ナショナリズムとインターナショナリズムとのあいだでバランスのとれた複眼的な関心にもとづいた研究が続行されれば、ワイルド文学の知られざる魅力が明らかになるものと期待できよう。

もうひとつのワイルド研究の新しい方法は、セクシュアリティ・ジェンダー的研究である。ワイルドは同性愛者であったという伝記的事実があるから、こうした関心の研究は当然のことのように思われるかもしれないが、最近のワイルドにおけるホモエロティクスの研究は精緻を極める。この関心は、文学テキストの解釈、唯美主義との関わりといった文学内部の問題に向けられるにとどまらず、ワイルドの特異なセクシュアリティのなかに、世紀末ヴィクトリア朝の文化的・社会的問題への急進的批判、さらには、そこに窺われる20世紀末現代における西洋文化の病理を暴く先見性の胚胎までを見てとろうとする研究にまでつながっている。Ed Cohen, *Talk on the Wilde Side: Toward a Genealogy of a Discourse on Male Sexualities* (Routledge, 1993) や Jonathan Dollimore の業績 (Gagnier の同上書を参照) がその代表であろう。また、こうした作者の個性・主体を、ポストモダニ

ムにおけるような文化的構築物として見ないで、あくまで本質主義にもとづきワイルド固有の「個性」の存在を前提として、その特異な個性の形成をフロイトの精神分析主義にもとづいて解明しようとする Knox も、ワイルドのセクシュアリティ面に強い関心をもつ批評家に加えてよいだろう。

こうして、ワイルド研究にあっては、新しい研究の動向が見られ、現在、英米文学研究において一般に実行されている研究方法や関心のかたちはほとんどすべて出揃っているといっても過言ではなかろう。その点から言えば、ワイルドは、英文学のカノンに属する他の作家並みに研究されるようになったという、慶賀すべき研究状況にあるといえよう。

ただし、ここで留意すべきは、こうした研究状況の目新しさに翻弄されることなく、果たしてこれらの研究によってワイルド文学の面白さや豊かさが新しく掘り起こされたのかと、反省を忘れないことであろう。そのためには、「コンテクスト」の導入を言うのなら「テキスト」の重視をもあわせて主張しなければならない。ジェンダー論や文化的研究がともすれば一般論に墮するという危険を回避するためには、個々の文学テキストのもつパティキュラリティを尊重しなければならない。

いま、ワイルド研究の新しい動向を踏まえ、かつ、それへの反省をも自覚しながら、ワイルド文学を読み直すことを通して、21世紀に通じるワイルド文学の可能性を探ってみたい。本シンポジウムにおいて、角田氏にはジェンダー論の観点から、薩摩氏にはアイリッシュネスの観点から、鈴木氏には思想史というコンテクストから、それぞれワイルド文学の新しい可能性を語っていただいた。

なお、本要旨の末尾には、1990年以降のワイルド単独の研究書および出版作品についての書誌を添付した。

ワイルドにおけるセクシュアリティと テクスチュアリティ

角田 信 恵

今日はワイルドのセクシュアリティとテキストとの関係について、わたしの考えを述べさせていただきたいと思います。ご承知のように、80年代、90年代のゲイ・クイア批評の勃興によって、ワイルド批評は大きく変わりました。それまでのワイルド研究は、ホモセクシュアルであるにもかかわらずといった態度で、アカデミックな研究の場においてそのセクシュアリティを云々することなど考えられないことでした。それがエド・コーヘンやドリモアあたりから、ワイルドのセクシュアリティはワイルド批評のひとつの要となってきたようです。しかし、ワイルドをめぐるゲイ・クイア批評の現状をみてみますと、90年代において主として行われたことは、テキストに同性間の欲望の暗示を読み取るといった作業がほとんどでした。たとえば、『まじめが肝心』のバンベリーという名前のバンとは隠語で尻のことでベリーは埋めるという意味だから、バンベリーという名前には肛門性交が暗示されているとか、いや当時はバンにそのような意味合いはなかった、といったような議論があったわけです。

しかし、ワイルドにおけるセクシュアリティとテキストとは、そうしたレベルにとどまらない関係があるのではないかとわたしは考えています。すなわち、ワイルドのテキストの構造そのものに、そのセクシュアリティとの構造的な関係が見てとれるのではないかと思うのですが、このセクシュアリティとテクスチュアリティとの構造的な関係という問題はまだまだあまり論じられていないようです。かつて、フェミニズムに関して、女の問題を女の作家が描けばフェミニズムの文学となるのか、それともエクリチュール・フェニミンかといった議論がありましたが、それと同じで、ゲイ文学に関して、同性間の欲望が描かれていればゲイ文学と言えるのか、それともゲイ文学には独自の構造があるのか、といった問題を立てることができるでしょう。

同性間の欲望を描いた作品として、E. M. フォースターの『モーリス』やラドクリフ・ホールの『さびしさの泉』は有名です。しかし、これらの作品はきわめ